

歌集

この道

寶邊正久

はしがき

昨年八月、国民文化研究会の同人、國武忠彦、澤部壽孫、磯貝保博三君の突然の来訪あり、私の歌集を出さないか、お手伝ひしようといふ篤いお誘ひがあった。会の出版物としてではなく、組版までは自分達素人で出来るから、小さいものを作つたらどうかと、たつてのお勧めであつた。あなたももう年だから歌集くらゐ残したらどうかといふお心だつたらう。

思へば私達の先輩や仲間の中で生前に歌集を残したのは夜久正雄さん、山田輝彦さん他一、二の人に過ぎないから、と断然お断りした。一方、私達同人が和歌を発表する機関誌は、昭和四十七年八月から始まつた青砥宏一君の『青砥通信』、その死後を引き継いで六十二年一月から澤部壽孫君の『澤部通信』、彼が勤務の都合でひいたあと平成十四年二月から折田豊生君の『短歌通信』があり、今日に至つてゐる。他に不二歌道会の機関誌に掲載されたものもある。そ

れら歌稿片々を一纏めにして送ってくれたものに目を通すうちに正直、思ひあらたなものがあつた。師友への思ひ、郷土の風景、生きゆくものこのころ等々沁み沁みと思はしめられ、三君のお誘ひにのることにした。

「萬葉はいいねえ」と何度も言ひながら人麻呂の歌や東歌を朗誦して下さつた遠来の房内幸成先生を思ひ出す。夕日の射す山口の下宿の一部屋で友人と一緒にそれを聞いたことを思ひ出す。古くから伝へられた歌はまさに「神の開きしこの道」である。題を「この道」としたいと言つたら、澤部君は『天地四方』（川出麻須美歌集）に「かにかくにひとはいへどもひとりゆくこの道この歌我はたのしも」といふ歌があると言つてくれた。

平成二十四年二月四日

寶邊 正久

昭和五十年

松吉正資兄の故郷大島墓参

光り輝く銀波ゆたかにめぐらして大島は立つ瀬戸のもなかに
浦々をめぐりてゆけば碧き海を透して底の白き目にしむ

みかん山のだんだん畑をたづねゆき友が家訪ひし三十年前に
みかん畑の高きにありし友が家はいづくぞ春の空はれわたる
海の辺のしづけき寺のみ墓辺にまゐり来りぬ妻子と共に

亡き友に向ひて誦しまつりけり共にいただきし大御歌五首
身をくだきみ国守りしなき友がひた祈りたる忘れざりけり
年月の願ひ果してみ墓辺に香奉るわが妻も子も

御在位五十年の天長節に

紀の国の沖辺はるかにのぞみます若き日の君偲びまつるも

大御代の雄々しくあれと立山を仰ぎましけむ大君を思ふ

すめくにの危ふき時はひとりして難に堪へ給ひし大君たふと

帰りこぬ民をば待ちに待ち給ふ大御心ときけば泣かゆも

五十年のみいつくしみのおん心したひまつりてみ民らは生く

おほぞらにみなぎらひつつふるあめに緑の若葉いやあらたなり

いちはずの花伏しぬれてけふの日を迎へまつるも心しみみに

昭和五十一年

在函館、長内兄へ

わが友のことば光りてわがむねによみがへりくる街ゆくときも
友のことば思ひうかべてやちまたにありつつうるむわが胸も目も
遠くより友がいそそぐあたたかきつよき光を感じをりわれは

明治神宮参拝

さみどりに輝く空を仰ぎつつ松のかげふむけさの参り路
陽もとどかぬ葉桜道を辿りゆけば真清水の湧く小谷ありけり
花の時にはあらねど朝のかぐはしき樹々の下道ゆくが清しさ

伊豆にて

朝雲のいづべに富士はあらんかと見れば雲の上頂き見えつ（葦山の宿）

妻を呼び庭のもなかゆ富士の山のはるかに高き頂きを見る

頂きの黒き富士がね天の上に姿あらはすかしこきろかも

伊豆の野にたなびく雲の上いや高き富士に向ひて柏手を打つ

加藤敏治兄へかへし

一年をふり返りつつ来む春を待つとふうたをくり返しよむ

年暮るるその夕闇に雷鳴をひとりききけむ君をし思ふ

妻や母、子達も深く憂ひまししその一年を君のりこえつ

遠くみてすべはなけれどわが目にはしみてうれしき「よみがへり」のうた

昭和五十二年

くるしみも悲しみもありしこの年に友の思ひ出をかきつぎし君
病押してかきつづりたる友憶念のふみにこもりしいのちを思ふ

長内俊平兄へかへし

青き空に白雲うかぶ画を刷りて目にすがしかも君の賀状は
すみ渡る空のかなしさうち仰ぎ祈る心の沁みるばかりに
遠つ世の親王みこのみうたの旅の空をうつす色とも偲ばるるかな
病む母の床辺にそひて声合せ征夷のみこのうたうたふ友よ

長内兄へ

雲仙にゆかれずといふ君のふみにあふるる心偲びやるかな
次々に友の名あげてその顔のあらはるるといふなり友は

大間の崎にながるる対馬暖流にわれらを思ふと君うたふなり
よびかはしつつ日本のいのちを祈りける友の多くはいくさに死にき
川なして流るる北海われは知らずあひ見るごとく心おどれども

平戸一泊

平戸なる小さき波止場にオランダの石塀のこる秋の夕よ
元寇を防ぎ八幡船に押し出でし松浦党のいさを思ふ
開けゆく日本に心肝くできたる浦、菅沼も平戸に出でし（浦敬一、菅波貞風）
満州の露軍探りて身を捨てし沖禎介のふるさとの島
東に陽は出でんとしてほのくらき海は風なく平戸をめぐる

昭和五十三年

賀春帳

君が代を千代にと祈るをたけびの清きその声耳に残るも（田所さんを憶ふ）

昭和五十四年

年賀の歌

土塀道は何の香ぞする朝夕に杖ひびかせて父がゆく道（父九十二歳）

春風にむかひて走りくるまごのただひたむきのゑがほいとしき（孫二人）

青砥宏一兄のうたよみて

先輩の旅案内してわが友が歌ひはらししその歌ここに

八雲立つとどよめき仰ぐよろこびの天ゆくいきほひしるきその歌

神つ代のみつるぎ産みし玉はがね今に伝へて出雲にありとふ
友が住む出雲山川ことそぎてうるほひ多し古事記さながらに
雨の夕太鼓うちならすさをとめを忘れずと友歌にのこしぬ
八雲立つその雲立てりとはよめきてカメラにうつす神のすゑたち
出雲路の神々とひてゆく友はやすさををいたくこふるらし

勅題「桜」

靖国の宮より子らが移し植ゑし桜やうやく花咲けりけり
萌え出づる嫩葉わかばがくれに桜花白く咲きけり朝の門辺に

昭和五十五年

昭和五十六年

天長節、龜山神社に詣づ

うぶすなの宮居の前のやちまたに人かげもなし雨降り出でて

テントの中人にまじりて記帳せりけふの佳き日を壽ことほぎまつると

八十の齡召し給ひける大君の神さびいますとはるかをろがむ

「けふの佳き日」とみ前に共に唱ひ出づる佳き歌うれし胸せきあぐる

神ながら君が思ほしめすままに御代開けゆく神の守りに

君がためのちすてにし民の子の魂かがやきて泣くと思ほゆ

小雨降る宮前に立ち唱へたる諸声清し天皇陛下萬歳

父の誕生日（九十四歳）

あたたかき鯛の骨蒸ゆこっせしつくりと骨も清らに食べたまふ父

四十路越す孫が届けし河豚の身の透きたるめで父とり給ふ

歌よするまた電話する孫たちの祝ひのことばを父うけ給ふ

ガラス窓にあたたかく射せ冬の日よ大き目鏡にて新聞を読む父に

満中陰法要相済ませて

父といふ字を書きゆけばわが父のたまもすがたもたち来この字に

昭和五十七年

昭和五十八年

父の納骨のため高野山に詣づ

大杉のま近よぢゆくケープルの窓より見たりつはぶきの花

丈低き黄菊白菊瓶にありて高野の坊に物音もなし

わが父の骨箱を預けこの夜の宿坊の酒よしとぞ思ふ

小夜ふけて雨降りいでぬ全山の杉の木立や濡れつつあらむ

歩を延ばして吉野

一筋に君にちぎりしものふの矢じりの跡をけふみつるかな

御輿遠く入ります吉野の宮にしてなごめまつりし山桜花

みよしのの山の尾根より谷かけて花散りかかる小雨もそひて

更に、笠置山

若葉立つ笠置の山の頂の御所跡濡るる朝の雨に

正成公出で参上し給ひける笠置の山はいまもごごしき

巨岩奇石めぐりて防ぐ宮方のたたかひかなし一の木戸の趾
霧晴れて笠置の山のまな下の木津の瀬波のあきららに見ゆ

一條浩通兄を思ふ（一條眞通氏より比島巡拝記を戴きて返し）

はらからがルソンの土に落したる涙を君ようけ給ふらむ

いくさ遠く過ぐるといへど身を捨ててみくににつくししいのちは消えず
にこやかに部下はげまして往き来せる君の陣地よ低き丘のべ

もののふの眉もきびしく戦ひし姿しのばゆその戦場に

砲弾の降り裂け散りしと偲びつつはらからが立つその一とこ

ねんごろの供養たちまち君のたまやそのふるさとに帰り給ふらむ

異国の子らも寄りくるみまつりのかなしや君のゑまふがごとく

みんなみに幾千里ども君がゆきし広きアジアの空かぎりなく
亡びざる日本を祈りて身を捨てし君を忘れめや年はふるとも
山口のわれらが宿にて親鸞と松陰を読みしころなつかしき
ふるさとの厚き冬着をかぶりては書よみたりし君にしありけり
はらからがルソンの丘に君の名を呼びしときけばたへがたきかな

昭和五十九年

岩越豊雄君の案内にて、小柳、長内両君と共に箱根山中の見物に出かく、

先づ日本武尊の碑

「あづまはや」のいしぶみの前に友と立てば心ゆるるも海は見えねど
箱根山越ゆる古道春たけて霧のみふかし芽ぶく木立ちに
足柄の山の峠たをみちしづかにてつつじをさなく咲きゐたりけり

箱根神社参拝

玉くしげ箱根の山のかむなびのひめしやらの大木は霧中に立つ
神と仰ぐ山にむら立つひめしやらの赤き大木はめづらなるかも

明治のみかどいまのみかどとみゆきありしそのいしぶみに八重桜散る

親鸞上人訣別の碑

親鸞が性信坊と別れしを偲ぶか友の去りがてにする

湯本の蕎麦

山いもをすりてかけたるそばそへてのむ酒うまし肩をよせつつ
箱根路のふるき跡とめ案内せし友とそばくふたのしくもあるか

昭和六十年

青砥宏一兄へ

なつかしき青砥通信届きけり五枚一杯につづられし歌よ

すこやかに病いえたる友の喜びあふるるかと思ふこの通信に

一七二首かきつけ終りて安らぐか君を偲ばむこのすり文に

日をおかず君を励ます長内の歌にはわれも涙せりけり

昭和六十二年

澤部壽孫兄へ、青砥宏一兄のご命日に（二月二十八日）

青砥ゆきてめぐる一年ひととせくすしくも東の方に「通信」おこる

わがそばに青玉色の『青砥集』おきて読みゆく「澤部通信」

青砥君が鉄筆もちて友どちに歌ひかけたる心継ぐとや

をごころをふるひおこしてなしにける君がゑがほのなんぞなつかしき

『青砥通信鈔』発刊の礼（長内俊平さんへ）

なつかしき故友のゑがほの浮びきて戴きまつるこの遺稿集

君が心つくしし身をもいためしと思ひつつ繰る遺稿集かな

青玉の青砥の青き表装に夜久さんの文字しづむがうれし

古の出雲の國の神と共にいます友かと今更に思ふ

ををしくも友がふみゆきし道にしもみちびかれゆくわれらが伴は

大き森よりわきくる如きしらべしてその歌われらの胸に鳴るかも

吠ゆる如くゑまふが如くその歌はわれらの胸に消えずあるかも

小柳陽太郎兄が副島蒼海を講ずるを聞きて

久々になつかしき友つどひ寄るビルの一間のにぎにぎしかり

夢にわれ帝傍ていぼうに謁えつすと蒼海の詩よみあぐる友の声高し

清國に使者たる蒼海の威を偲ぶ友のことばにゆるびあらざり

入院中の加藤敏治君、一夜の外泊の許可がおり自宅より電話を呉れたり

なつかしき声聞えきぬ病みふさぎぬむと思ひし友の声なり

広き家の居間の電話機とりてゐむと君がゑがほを思ひつつ聞く

友にみな電話すなりといふ君のうるほひ含む声聞きてあり

今年は阿蘇かその宿訪ひて会はまほしといひしを聞けば思ひはるかなり

あすはまた病院に帰ると君いへど癒えゆく君をしみみ思ひぬ

一杯のみつつテレビで民謡を聞き遠き友を思ふ（長内さん宛）
老いながら高き声にてうたひゆく民謡あはれ聞きあかぬかも
ふるさとの荒き風さへ恋ひやまぬ歌声ながく引くがかなしさ
友のくに津軽をとめが歌ひける舞台のせなにねぶたあらはる
おもしろき歌の拍子に聞き入りて友を思へり御酒くみながら

澤部君のコロンビアへの出張の際の歌をよみて

くれなるにかがやく空と海越えて君ゆきかへるつとめ果すべく
道の辺の紫の花目にとめてボゴタの町をゆくがしのばゆ
大君のみやまひ聞きて外国よりひたすら祈る友の憂ひよ
よろこびもまた悲しみも湧き起るままに歌ひし歌すがすがし

便りに添へて(小田村理事長宛)

花田惟孝氏、高野一夫氏による百武礼之兄の最後に関する文章『いのち ささげて』

六七頁所載)を拝受して

直撃の弾たまに裂かれて外國とくににうせにし友を思ひやりつつ

祖國への祈りを胸にもだしたる友のかばねを思ひやるかな

戦場の君の最期のことはのいたましやいのち過ぎてかへらず

日の本のますらをの道ふみゆきしそのいさをしは忘れざりけり

笠戸ドック歳末感

人影も少なくなりし船渠にて美しき鳥鉄柵にとまる

年暮るる艦装岸壁に立ちて見れば日かげきらめく青き海の上

昭和六十三年

青砥宏一兄の御霊前に捧ぐる歌

君ゆきてあとを継ぎたる澤部通信に歌あつまるも君の守りに

ふたとせ

二年はたちまち過ぎつことごとくに君を思へば泣くべかりける

すさのをの「こやつよ」と呼び給ひしを深くもさとる君こひやまず

いのち細き世にもあるかな亡き友のみたまの守りをこひのみまつる

木枯の吹きのままにくだちゆくよるはしみじみ君思はるる

『勝鬘經義疏の現代語譯と研究（上卷）』を拝読して

何といふみ恵みならむ友ら編みし義疏研究の書ぞかしかみこき

一言一言太子のみことばうつしくもしのびまつりて文つづり給ふ

桑原さんのみことばかなし更くる夜をひとりごつごとく語りまししか

聖徳太子のみ心かしこみかくのごとくのべゆく研究世にあらめやも
はつはつに降りける雪も夕にははれてあかねの雲うかびけり
日かくらば心々にこの書をひもとかむ友ら偲ばるるかな

長内俊平さんへ

春寒み岡越えにして遠き富士見たりしといふその日したしも
遠き富士見しよろこびをそのままに遠き青砥に告げしといまきく
空澄みて月さえわたる春寒の机によりて友は歌よむ

春寒のことばよきかな富士が見え友思ふ心と胸にとどめむ

山田輝彦兄歌集『海のこゑ』を戴きて

杖曳きて立てる歌人いにしへもかくや聞きけむ海鳴りの音を

友あまた失せにし海の荒潮のこゑ聞ゆかも君のみうたに
吾弟をとしのび泣きする友の歌の水繩の山は雲にかかすむ
恩愛のかなしき歌よ花よ雲よとこしへにあれこの友のために

また

向つ丘の樹々の若葉の雨にぬれ夕ゆふべはくらくもの音もなし
残されし春いくたびぞと歌ひたる友の歌集を開き見むかな
亡き人をしのびて歌ふ歌よめば逆巻く海のこゑの聞ゆる
いつかしきいのちありけり亡き人のみたましづまる日本やまとの國は
柿若葉見えずなりゆく夕暮れにまたさはさはと雨の音する

丸亀より瀬戸を望む

大橋の電光遠く点滅し瀬戸の海原暮れてゆくかな

この海を波をおこしてゆきにける戦艦大和思ひみむかも
つはものをあまたのせゆく戦艦の機関のひびき聞ゆるごとし
つはものがゆきて帰らぬ海の面の何ぞしづけき夕なるらむ

慰霊祭の様子を知らせて頂いて（長内俊平さん宛）

友つどひ御平癒祈りて歌ひたる君が代思へば胸迫るかも

わが師わが友のみたまともろともに御平癒祈ると偲ばるるかな

遠き友の娘らの来たりてわが友らやさしく慰めしときけば泣かゆも

（加藤敏治さんのご息女・古閑恭子さん、倉林佐代子さんのこと、和多山儀平さんの姪御）

儀平さんの雄々しきいのちをかこみたる集ひに娘らも泣かむとすらむ

心知る友に囲まれよみがへるいのちあらたに娘らはゆくらむ

十一月九日

山をゆけば紅きもみぢの見えそめてみ空ゆたかに秋たけにけり
もみぢ葉の映えてあかるき大空にみなぎる光をせつに思ひき
民草に秋の光はいそそげどわが大君のみやまひあつし

みやまひのいえませとこそこの空の光の下に民は生くるに
みやまひに堪へて生きます大君の治しらすみくにの秋深みゆく

一月七日、崩御の日の歌

大君は御危篤にありと聞きにつつ涙あふれ来くテレビの前にて
大君のよろづ代呼ばひて失せにけるあまたわが友天あめに泣くらむ
わが大君神あがりますと聞く時し風吹き荒れつ雨もまじりて

昭和六十四年

亡き父もここにわれらと共にゐてしのび泣きする心地するかな

黒き切れ買ひ求め来て日の丸の弔旗掲ぐる時の間かなし

涙ぬぐひて畏みまつる新しきすめらみことの御代継ぎますを

大御身おほみみはかくれませども天つ日継ぎ絶ゆることなく天にかがやきぬ

危ふしとも危ふき御代を守りませし大御おほみいたつきしぬびまつらむ

國がらをただ守らむと宣のらしつるみことばは神言かみことといふべかりける

かぎりなきみいつくしみぞわが國のいのちなるらむをろがみまつる

銘酒二本有難く頂戴仕り候（長内俊平さんへ）

友逝きしその日忘れず遠きより電話架け来し君にしありけり
友思ひてさびしといふか共に飲めとはるばる届く君の酒はや

平成元年

君の酒抜きてゆうべは盃はいあげき青砥青砥と名を唱へつつ
わが大君神さりませば青砥の命みことあま天つみ空に泣きて伏すらむ
大みはふりの近き時にも亡き友をしのぶ心のあつき君なり

テレビにて御大葬を拝す

み手振らすわが大君はあらせなくにみ車はゆく都大路を
氷雨降る都大路に並み立ちてをろがむ民よわれも泣かゆも
雨に濡れて弔旗しづけきビルの大路おほぢに悲しみの曲小さく聞ゆ
「音たえてさびし」とのらし森の奥の鳥しのばししみうた恋しき
わが國の危き時にくだきましし大御心をいま偲ぶかな
列聖の大みたまのもとに還りたまふわが大君と偲び泣くなり
「めでましし山川草木やまかはくさき」とみ子のみかどのみこゑきこえてかなしみまさる

加藤敏治兄の葬儀終りて

春されば球磨川土手を君と共にゆかむといひしがむなしくなりぬ
大君のかくれましし時ものいはず歌はずひとりいかにありつらむ
いかばかりかなしき病にありけむをなすべしらずわれはありけり
亡き友をするどくよびしことありきと聞けば涙のとどめかねつも

球磨川の水面朝日にかがやきて流れゆくかも君在るごとく

香川亮二兄へ

飛び立ちてゆくへもしれぬ白鳥は亡友ともに似たりと嘆く君かも(寺尾博之兄のこと)
飛び立ちて遠ざかりゆく白鳥の大き羽音はわれにも聞ゆ
國のまほろば大和を恋ひて過ぎゆきし友多かりきその胸の火よ

友しぬびの文書きつぎてゆきし友をつぐはおのれと君いひにけり

(ゆきし友は加藤敏治兄)

亡き友も今ある友も共にありてゑまひかたらひいのちはてなし

平成二年元旦の賀状に

入日さす海原の上とぶ鳥の行く方はかなく年暮れてゆく

天翔るおほし^{あまがけ}ろとりを御哭泣^{みね}きて追ひし古事^{ふるじし}思ふ夕は

平成二年

長内兄と同行して武蔵野御陵参拝

高杉の梢の雪の落つる音聞きては歩む清きまゐり路

すれちがふ人らなつかし雪ふみて大杉の間のまゐり路^まゆけば

新しき木の色映ゆる大鳥居のみ前に立ちてをろがみまつる
天の原いや高くますみささぎに昭和のみかどをろがみまつる
武蔵野の高き丘の上^へ神さびて若木のこずゑに雪は残れり
父陛下母陛下の御みささぎとならびおはします武蔵野御陵は
空晴れて雪まだ残る野辺の路を友と歩むも心ぬれつつ
鴨うどんすすりて友が語ること昭和の民の思ひなりけり
わがために雪よけ靴を持ちてくれし友と手を振る別るる駅に

御即位奉祝提灯行列に参加して（小田村寅二郎さん宛）

天皇陛下萬歳といふ乙女の声すみわたるなり銀座大路に^{おほち}

一系の天子御位に即きますと旗振る民の行列にわれも

夜の大路をともしびかざして幾萬のみ民は進む宮城さして^{おほち}

いでましの時近づけばおのづから萬歳の声次々にわく

ともしびをみ手に闇路を進み給ふ両陛下のお姿スクリーンに拝しぬ

両陛下いまし二重橋にありたたし民の萬歳をうけたまふなり

國民をしらすべらぎ國民はただに仰ぎて涙せりけりくたみ

名残惜しむ民らにまたももしびを振りて陛下は帰りましけり

平成三年

三浦貞蔵様夫人に、追悼記掲載の国民同胞二月号百部をお送りする時

刷り上げし追悼の記のうつしゑに君のひとよを偲びてつきず

直会なほらひに椅子引き寄せて語りましし大人のおもわの忘らえなくに

山本先生の資料つぎつぎたまひたる厚きみ心思ふさびしさ（山本勝市先生を

聞きもえぬみ声み心うつしたる筆あと見つつしのぶがかなし

一筋にたゆまずみ国に生きまししみ心かしこをろがみまつる

倉前義男大兄の御霊前に

おそひくる病に堪へていのちたけく歌ひし人はかへらざるかな

火の國の遠き潮騒いまにかも聞こゆるごとし君を思へば

火の國のますらたけをらみいくさに生き死にしけるたふときろかも

強悪のはびこる世界にたちろがぬ日本の道を君は説きけり『悪の論理』を

うつし世のうつりゆくまま心つくし神ながらなる日本を祈りき

西東いくさのあとをかけめぐりつくししひとのいさをを思ふ

廣瀬誠大兄へ

七沢の宿の一間に朝ひとり朗誦する君の声聞えけり

大御歌古事記万葉朝ごとに誦するならひか声ゆたかなり
生死こえし手術のあとは見ゆれども聞ゆる声にいのちありけり
たまげたと青砥が聞きしを思ひ出づいのち鳴りひびく君のみこゑに

甲府青松院に三井甲之先生のお墓を訪ねて

夕はや暮れなむとして草濡るるみ墓の前をたづね詣りぬ
石塔の低きみ墓に焚く香も雨に濡れつつをろがみまつる

「コトバハ生キテイノチヲツナグ」そのみうた傘さして誦むみ墓の前に
人の世をかなしとのらししみことばに開かれしわがいのちなりけり
み祖達と共にわが大人いましけり甲斐のまほらの奥津城どころ
承命院の文字やや古れど声に出し読めばかしこしみ名呼ぶごとく
秋雨のやまず降りつつみ墓べに百日紅の花咲きのこりをり

山県神社境内に立つ三井甲之先生歌碑を拝す

「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」

み社のくらき木かげにわが大人のみ歌いしぶみひそと立ちけり

ことそぎてすぐなる文字のみのちのしるくもあるかこのいしぶみに

いのちささげてつとめし人らこの歌をわがいのちとぞとうたひしものを

はるかにも慕ひまつりしいしぶみの成りしいさをのしのばるるかな

秋雨は降りやまずして石の文字も見えがたくなりぬ夕の闇に

加藤敏治遺稿集の編集を終へて

いくさ終りてなほ一すちにゆきし人のいのちは生きむ後の世までも

やはらかき光湛へて語りたるそのままいつも思ひいづるも

平成四年

平成五年

港の鳥

朝日さす倉庫の屋根の近きより遠き果まで鳥とまりけり
雨はれて日もうらなる春の朝鳥ならびて海を見るらむ
朝日さす春のみなどに餌をさがしたたかふ鳥の数知れずけり
時の間に鳥いぬれば鳩たちがおひおひ帰る屋根の上の春
花をうたひ君に告げんと思ひしに目の前の鳥をいひてをはりぬ

上京車窓

雪おける比良の高根はかがやきて春の霞の空に立つ見ゆ
西の窓に志賀の大うみうすがすみ遠きつら山雪光る見ゆ
絵を彫るとこのうみのべに住まひたる友なつかしと思ひつつゆく
(長内俊陰君)

伊吹トンネル出でて開くる関が原「のぞみ」は駆け下るスピード増して

濃尾平野のもなか駆けゆく道のべに花咲きみつる梅はたけあり

遠州の浜松砂丘は見えねどもかすむおほ灘はてもしらず

わが行く手春の霞の高空にみ雪かがやく富士見えそめつ

遠くより近くに迫りまた別るる真白き富士の見もあかなくに

別れゆく箱根の山のはざまより富士の高嶺は神さびいます

鎌倉のおとども祈り給ひつる雨降山見ゆ広野へだてて
あめふりやま

皇太子殿下御成婚奉祝歌

晴れ渡る夕明り空に花火揚り提灯行列立ち出でむとす

日の御子の御子が妃を入れ給ふ吉き日晴れたり日の暮るるまで

皇太子殿下御成婚奉祝と書かれたる幟幾旒行列に立つ

わが友が三日三夜もてふるひたる墨痕ののぼり五十旒行く

澄み渡る万歳の声に人和して遠く揺れ立つ提灯の波

月おそく夜空暗きに提灯は肅々進む人みな和みて

万歳の声をあげつつよき友と語りつつ行く提灯行列

二千の人かくも集ひて皇室のいやさかを祈ると思ふうれしき

夜の町に点々つづく提灯のながくめでたく祝ひけるかな

澤部通信・六十五号の歌をよみて

長き旅終へて帰れば妻の髪白きがまじるといひし友はも

六年へて帰れば子らは背丈みなわれより高しと友はいふなり

妻子らをおきて海の外ゆききせし君ややうやくいま家に帰る

妻子らと共に暮らせば大空に雲ゆく秋も身には沁むらむ

君の歌に君のゑまひを偲びをりつはぶきの花にほふ夕に

松吉正資兄の遺稿「不願」を靖国神社の戦没学徒遺品展示会に奉納したり

きと基順兄の知らせあり、その「不願」を読みて

若かりし友口づからその思ひ語るが如しこの文よめば

全き表現を求めつつ君はもどかしく噴き出づることばに身をなやませし

楠公を慕ひ防人の歌を恋ひ思ひ定めけむ「不願」の一生を

ひとよ

かへりみず死するいのちは念仏のかなしみに通ふと若き友いへり

七生滅賊を願ふところは永劫のかなしみならむと友いへりけり

数ならぬおのがいのちをささげまつるほかに道なしとつひにいふなり

基地の幕舎のベッドの上に腕くみて君在りしとふ出撃前夜に

孤り死するいのちのはたてすめくにを祈りし時の間思へば泣かゆ

夢にみる君はかうべの髪白くにこやかにゑみてありけるものを

冬期オリンピック開会式をテレビにて見る

如月の春のはじめのオリンピック、リレハンメルは雪ふりやまず

國の名を呼ばふをさなの声澄みて空にひびけりはしきその声

旧ソ連旧ユーゴの国もありき白き大地を選手踏みくる

地に住みて興しし国の民よ旗よ次々見れば涙ぐましも

わがチームかざす日の丸大国旗かがやき進む喚声の中

山口県大島にて行はれた松吉正資兄五十年忌法要に参列（祭主・令弟基順君）

春の眞日照りそふ庭に咲き満つる桜の花は君のゑまひか

平成六年

よりつどふ六十たりの友経を誦す声和らぎて堂にみつるかも
うつそみはよし砕くとも忘れじとふ歌のいしぶみ花かげにたつ
咲き満つる桜並木の坂道をのぼりてゆきぬ君の母校に
目の下の漁港も遠き沖の海も見ゆる丘の上花咲きさかる
かへらじと思ひ定めて君が発ちし彼処の海べ花咲けりけり
かへりみず行きにし君が五十年のみまつりに来て花を見るかな

入院中の歌（長内俊平さん宛）

お守りのただに届けと急ぎ便にて送りし友のみ心うれし
代々木なる参り路ゆきて大前にをろがむ友の祈りかしこむ
朝な朝なおほみうたををろがみよみ給ふ友の心をいたたくわれは
「ゆたかならなむ」とみづからよませ給ひける大御心にいのりていきむ

阿蘇合宿の講義のテープが到着、長内さんの講話を二度続けて聞く
若きらと共に聞かむと願ひたる君の講義を一人聞くかも

内なるいのちゆ湧き来ることば「己をばかへりみむ」とぞ友言へりけり
太子のことば加納さんの忍持経歴みなつながりて涙し流る

父母を玉とあがむるさきもりの歌をうたひて泣く人思ほゆ（講師なり）

入院六ヶ月に及び、退院のをり（平成七年元旦の賀状に添へし歌）

夕まけて紅葉いよいよ赤きこの小道を帰る足裏たしかに

灯をともし浸る湯船の湯の清くあたたかきかな思ふことなし

平成七年

一月中入院せる長内俊平さん宛

君すでに退院せりと聞く朝の梅はあかるく咲きさかりけり
春なれや早鞆はやともの浦に立つ波のかがやく見れば友はるかなり
太子のふみ共に読まむと待つ友ら喜びまさむ春立つこの日を

常務理事会七首（下関の国民宿舍海関荘にて行はれし常務理事会の写真とお歌を

小田村寅二郎理事長より賜りし御礼に）

にこやかにカメラに収まる先輩ともを中に並ぶわれらよあかずながめぬ
重きつとめ荷ふといへど心合はせ進む歩あゆみのかるやかにこそ
西のはて「火の山」にして友待てば海はろばると晴れわたり見ゆ

（国民宿舍は「火の山」山麓にあり）

海の光背にして入りくる友の顔多みにあふれてただになつかし
わが長病みをつねはげまししみ心にいのちをえたるわれなりしかな
へだてなくわれにもみきをつぐ友をかたじけなしといただくわれも
この里のふぐをめつつひろなる思ひゆきかふ酒のたのしき

兄の五十年忌近く

いちはつの花咲きいでて吾兄あせ遠く去りたまひけるころをし思ふ
みいくさに破れわが家も焼け失せしと言ひてををしき兄なりしかな
いかばかり吾子あこを愛をしと思ひけむその三十年みそとせのいのちゆくとき
雪もよひの宇品の港いでゆくと父とならびしうつしゑの吾兄あせ
夜ふかきふるさとの海すぎゆきし君をここだも思ひけりわれは

(夜陰、関門海峡を通過して北満に出征せり)

みいくさにわがゆくうたげに君立ちて歌よみくれしあを送る歌を
かへりみず行くとふわれに白き山茶花咲けりと君は歌ひたりけり
みまつりを近み五月さつきの朝庭の萌ゆる葉かげに小鳥来鳴くも

弟を思ふ（同じ日に）

生きてあらば何を爲しをらむ孫いくたりあらむ年かと思ふかなしさ
馬を撫で馬に跨がり走りしとあをおどろかすなれなりしかな

（明専、今の九州工大、馬術部）

蒙古放浪歌しづかになれはうたひけりみいくさにわがゆくその夜に

夏の都合宿、長内兄の孫・祐子ちゃんのピアノ演奏で聞く「進めこのみち」

ピアノ弾く乙女はしかと見えねども前奏和音のひびき高しも

祐子ちゃん弾くらむ「進めこのみち」の音のひびかひ涙ぐましも

ますらをがこの道すすむ誇りをば高らにうたふ歌うつくしき

油山慰靈祭の直会の後

大銀杏の高枝ゆるがし俄かにも御堂たたきて夕立の降る

雨脚の白きが滝なし落つるとき杉山の辺に神鳴りわたる

雨かすむ那の津を遠く見さけつつみまつりの思ひつきずありけり

わが友の石ぶみの辺の若桜花咲く春はまた参り来む

御酒を捧げ歌たてまつる友どちの病めるも多き年となりけり

「堪へがたきを堪へ」と宣らしし大みことのり仰ぎし友のことば良かりき

筑紫をのぞみ加藤敏治君を思ふ

門司の町を走る車のかげ遠く澄みわたり見ゆ秋の夕は

日は落ちて暮れゆく夕ゆく船の白き波曳く秋は来にけり
古へを強く偲びて黙しける若きおもひの消えずありけり
友ゆきて七年へつと思ふかな筑紫山なみ清きこの夕

ハワイ真珠湾を訪ふ

平成八年

ホノルルの町遠そきて静かなる洋上をゆくわが乗る船は
ダイアモンド岬の沖より真珠湾をめざし行くなりきらめく海の上
わが國人も異國人も打ちまじり五十四年前の戦跡を訪ふ
くくにびと とつくにびと
岸狭き湾口にいま入らむとす大海の原は日射し高きに
ここにして敵の本拠を襲はむと潜望鏡おろしけむ夜のくだちに
敵艦ににじり寄るべく海底に待ちにし勇士を偲ばむとすも

あかつきの露頂ろちやう、発見、爆雷と死闘し果てけむ艇のなびと一つは

(露頂…潜望鏡を上げること)

水道をくぐりて近く敵艦に魚雷発射せし艇は何人

攻撃編隊空より来り米艦砕け湾口阿鼻となりにけるらし

航空隊と書かれし水際の奥深く格納庫見ゆ真珠湾頭

わが船は早くもフオード島を廻りをり戦艦ユタの残骸も見ゆ

アリゾナの白き墓標に真向ひて鎮魂のラツパ鳴りわたるなり

艦と共に沈みし将兵千余柱弔はれつつ星条旗立てり

静かなるパールハーバーの波の上に献げし花輪遠流れゆく

沈没艦の小さき標識点々と海に浮べりパールハーバー

乾坤を賭けしいくさの初一弾忘らゆべしや日本の民に

海原は晴れわたりけりみいくさの跡弔ひて湾を出づれば

多田幸男君の五年祭

蕭々せうせうと笛の音おこりわが友のみたまなごめの庭に侍るも

五年いっとせのまつりの庭に君を知る友らと共にしのびごと聞く

つはものいさをし示すうつしゑの君のまなこの光を仰ぐ

劔太刀執りし誇りは神官の世を終ふるまで失せざりしなり

「白梅を帽子に挿して」とうたひたる君の節わが胸に鳴るかも

杯あげて君を語らむ桜咲く丘べ明るきこれの円居まどみに

相見ては心に通ふものありし君を思ひて涙溢れつ

夕まけて風やや寒し海の面も遠き桜もほのかすみつつ

島根県六日市町を訪ねて

山深き里のはづれのやぶかげの日だまりに咲くかたくりの花

むらさきの透きてかそけかたかこ堅香子の群れ咲くを見つ片山かげに
丈低き百合にも似たる花群れてうす紫に匂ふやさしさ
裏山の高きなぞへの堅香子のやさしき花を妻と来て見つ

(堅香子の花…かたくりの花)

躑躅つづじと桜の歌 (長内俊平さん宛)

梅散りて先づ待たるるはむらさきの蕾ふくらむ山つつじの花
柿の木の下に植ゑたる若木伸び枝もたわわに咲く山つつじ
むらさきの小花あかるき山つつじ野にあるごとくわが庭に咲く
山つつじ花のさかりに時を得てこずゑまばらに桜咲き出づ
朝空の嫩葉わかばのかげに咲きそむる桜仰ぎて子らを思ふも
枝高く伸びたる若き山桜こよなく白しその花の色

庭の外の道より見れば葉と花と空にかがやくわが山桜

靖国の苗木を子らが持ち帰り三十年近きその山桜

よその花の吉野もあれどわが庭の桜気高く春閑かなり

中学後輩、海軍同期の岡崎宗隆君の遺墨(予備学生時の寄せ書き)を言付かり、

ご遺族に届けむとして

おのが名と心に刻むことば一つ遺しし跡をあかず見るかな

細き体、童顔の友が遺したる筆画は強くさやかなりけり

法然の流れの寺の君にして皇風こほうふうりくこうにあまねし洽六合と遺す

皇風を慕ひて難に赴きし君の心を忘れて思へや

水の無き硫黄の島に寄する敵と差しちがへたり同胞二万

大君の御拝を仰ぎ草かげのみたまら哭声給ひけむ島ぞかなしき

山川も君のみたまも皇風によみがへる日のなどなかるべき

初冬の日、武州御嶽山にひとり上る。山頂社前の碑に乃木大将題詞「日露

戦役記念碑」とあり

言挙げの塵ほどもなく戦役の名のみを石に深く刻める

ことあげの芥あぐたもくたの世に生きて直きいのちをひた恋ふるかな

大楓黄にもみぢして奥山の杉の上の空はれわたりけり

長内俊平さんへ

みちのくのりんごの重き箱あけてとり出だしけり友の思ひを

赤と黄のりんごをまづは仏壇に供ふるよろこび友に告げなむ

わが齒にはやや難けれどかくはしき甘味めでつつ妻とたうべぬ

平成九年

同右

凍雲いづくものくらしさ庭に咲きそむる白梅の花見るがうれしさ
風花のかすかに吹き来梅くに寄り花幾輪いくりんとたしかむるとき
地を忍び春は来にけり天地のめぐみはうれし木にも人にも

わが誕生日の前日、子より祝歌を贈らるるに返す、産後十ヶ月にして、は
かなくなりしわが生母のあはれ生誕百三年を数ふるに思ひいたりて

(生母の実家は回船問屋なりき)

橋の下に西を望めば青々と冬の潮のたゆたふけさは
かぎろひの射すや海辺のこの町にわが生みの母を恋ひわたるかも

大船の舫もやふ岸边に近々と母立たしけむ南部町なべちやうを思ふ

母ありしと思へばあはれ青々とみなぎりわたる早鞆の瀬戸

百年とうつらふみ代をわれはいま生きてありけりこのおやくにに

百年の神の守りのゆゆしかも日は照りて映ゆ海にみさきに

わがよはひ祝ひて吾子がよこしたる歌のひびきのたのしかりけり

異国にて悪食あくじきすなど憂ふるをききつつゆかむサイパンの旅

「大東亜戦争鎮魂の旅」詠草

中部太平洋戦没者慰霊祭（サイパン島）

万丈の断崖きりぎしの下ひもろぎを立ててみまつり仕へまつるも

島守る鬼と死したるつはもののみたまのみまへをろがみまつる

いやはてにいのちみづから断ちたりしかなしき心いつか忘れむ

何といふ鳥ども遠き木群より来鳴く声すもまつりにはに

艦砲にうちうがたれし岩山の洞を仰げば年ふりてみゆ

骨拾ひとむらひたりしチャモロの人みまつりに来て玉串ささぐ
つとめはたせし日本人をあはれとやまつる村人はらからの如し

パナデロの海

か青なる大海原に向ひたるパナデロ台地に立つ忠魂碑

大君のみうた石ぶみ立ちてありうせにし人のそばにいますごと

昭和天皇御製 千鳥ヶ淵戦没者墓苑（昭和三十四年）

國のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

バンザイ岬のぞむ台地をわれも人もものいはずしてたもとほりゆく

黒潮の海原遠く北の方大和島根ををろがまむかも

マツピ山頂、サイパン高女の碑に佐治さんが唱歌を捧ぐ

乙女らのみたまなごめに唱ひいづる「朧月夜」をきけば泣かゆも
乙女らのかげをとどむる碑の前にひざつき唱ふ声力あり

カロリナス大地、慰霊祭

テナンの南の涯の断崖をバンザイ・クリフと人いふかなし

間をおきて白波岩にうちよするみどりのみさき、バンザイクリフ

夏草の広き台地のここかしこ小さき墓あり名を刻みたる

ひもろぎを囲む花々吹く風に倒れむとすも広野のみまつり

チャモロの人ここにも来り「君が代」を共にうたへばみたまにかよふ

原爆積載基地

原爆を積みて発ちたる滑走路の人なき跡地にわれら立ちけり

人も國もつぶさんとせし意志のあときびしかも荒野に立つ思ひして

ここ広島ここ長崎と二箇所の碑アメリカの驕り肝にしむなり
鳥も来ぬ林の中の飛行場ハゴイといふを忘れざらなむ

澤部通信に寄す

青砥通信つぎてうたぶみ百回をいま重ねこし澤部通信

青砥君ゆきていよいよあらはれし道をしい行く君のゑまひよ

わが大君のらしましける神州不滅をうたがはずわれらうたよみゆかむ

花みづきの花咲きけりと記さばや澤部通信の祝ひに添へて

出雲の友は出雲を歌ひ北に南に歌ひかはせし日は滅びざれ

若きらと心合はせて歌の道ゆくとふ澤部通信うれしも

長内さんへ

原稿用紙に書きつ消しつゝ綴りたる文いたゞきぬわが手の内に
明治のみかど歩みましたる青森の海べ恋ひわたるしづの男の子や
しづかにも唱ひ出づべき「我は海の子」強く明るく涙ぐましも
墨すりて筆とる文に星野さん夫妻を待つとふ心しのぼる
琴聞きて心しづめて待つ友の来らばいかに笑ひ弾むらむ
長き留守にえぞむらさきは雪に折れ一もと残りしと君はいふなり
春來なばえぞむらさきのひととが花つけしとふうれしく聞きぬ

同右

凧ぎわたる海は朝日にかがやきて岸に寄りくる波のともしさ
足立山のふもとめぐりて大瀬戸に入りくる船かげあきらかに見ゆ

西の方雲は湧けどもわが瀬戸の上の中空澄みて青しも
亡き友のみたましづもるこの國にわかれ住みつつ秋たけにけり
わが庭に彼岸花咲きぬ友の宿の秋の訪れ深からむかも

九州秋季合宿にて（十一月二十二日〜二十四日、参加者五十四名）

冬に入る空澄み晴れて阿蘇の野の尾花かがやき風にゆるるも

高岳のふもとかがやく菅野より久住山並みはるばると見き

高岳のこごしき岩のかけ黒くすすき草山目にまぶしかも

枯れすすき迫るはざまの岩の上流るる水も日に輝けり

五万年前のよるひる天に噴き上げし火も土もいまに思ふすべなし（松浦さんの話）

轟きて落ちて平らのうちとなりし阿蘇の太古を友は語るも

石を採り地質探りし師の大き手指を語る友もありけり（松本唯一先生のことを）

夕かすむ阿蘇谷かけて照りわたる日はゆたかなり冬に入りゆく

大和行（平成十年の賀状に添へし歌）

尾花咲く野道を行きてしばしばも振り仰ぎけり三輪の神山

まきむく
巻向の山裾遠く秋の日の大和國原まのあたり見つ

平成十年

スピードスケート五百米競技、清水宏保選手優勝す

前傾ダツシユ、高まるスピード衰へずゴール過ぎゆけり清水選手は

めがね外し片手つきあげ優勝のをたけびをせり小さき清水が

ゆるやかに日の丸国旗うち振りてリンクをすべる晴れの清水が

表彰台のま中に立てるうまし人をたたへて大き日の丸上がる

君が代の曲うつくしく鳴りわたる殿下も見そなはず長野会場に
勝者の目に涙あり会場のその子の母も泣くが映れる

子が母をなぐさむることばつつましく語るを聞けばわれも泣かゆも

小林國男さんのご霊前に（二月十六日にご逝去）

不知火の筑紫の友の誓ひおきし道をしゆけりはしき君また
病み床にありて挫くけずよみいでし歌のしらべの強かりしかな
わだつみを遠くいゆきてみたまたちに捧げし歌よ天に溶けゆけ
戦艦伊勢のたたかひの跡しのびつつ友の名呼びし君を忘れず
長かりし戦後を生きてふるさとに帰りゆくらむかなしわが友

徳島清水寺の黒上正一郎先生御墓所に参る

桜咲く眉山びざんのみ空晴れわたり師のおくつきのいつかしきかな

慕はしくぬかづき祈る清水寺師のみはかべにわれらならびて

御遺文の初章をしみに聞きあたり明けゆく國をただ祈りつつ（小柳兄朗読す）

み教へに生き返りつつ亡き友も共にあるごとしひとつ心に

輪を廻がき春のみ空に舞ふとびをみてはなつかしみ歌思ひて

裏山とのらしし眉山うすあをく若葉萌えづる春にあへりけり

興源寺・梅木紹男つぎせ先生七十回忌法要

庭松の繁枝のかげに咲きゐたり二つ三つ白き大牡丹花

えにしありて詣でまつりぬ梅木先生のみ墓あかるき阿波興源寺

援けかはしむつみかはししみこころのこりて成りたる道統を仰ぐ

丈低きみ墓のみ名といさをしを刻める文字の清くあるかな
えにしありて建てまつりたる新しきみはかに春の日はしづかなり

長内俊平さんを青森に訪ねて（先帝ご誕生の日）

君が住む家居に生ふるななかまどの高き梢のなつかし今も
まさやかに君住むへやの窓の外に咲きさかりたるむらさきつつじ
むつの海遠に見ばやと月見野の丘を行きしが小雨降り来し

朝毎に君がとなふる大御歌いま共に聞くうれしからずや

山毛^ぶ擗^な深き八甲田山みちわけ入りて山の出で湯に友と来にけり
酸^すケ^が湯^ゆといふ湯場ひろびろと湯気立ちて友と浸れる湯の親しもよ

車中にて（長内俊平さん宛）

遠くより鳥舞ひ来ると君がふみ手にひらきよむうれしかりけり

夜久さんの武蔵野のかつこうと甲田ねのかつこうを思ふその鳴く声を

長き文のあとに「かしこきおもひを具せずしてただほればれ」と君記しけり

かしこきことあげ今もなしつつそのごとくただほればれとありたしわれは

故友とももわれらも共にあるなる「日本」にただほればれと入りなむとねがふ

寺尾博之さんのみたまへ（福岡油山に於ける慰霊祭）

今上陛下御製拝誦 沖繩平和祈念堂前（平成五年）

激いそとせしかりし戦場いくさばの跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

五十年を過ぎにしいそとせのちも大君は戦場に立ちても思ひ給ふ

油山にはててかなしきいさをしをもおさめ給ふらむわが大君は

戦場の遠きはたてに平らけき海みそなはす大御心はや

この日、小林國男兄を憶ふ

花を抱へ山に上りて年毎にみまつり仕へし君に会へぬかも
なほらひの広きみ堂にけふもかも君いますべし笑みをうかべて

長州奇兵隊・諸隊々士百三十年祭（東行庵、平成十一年の年賀に添へし歌）

豊前小倉、戊辰越後と誌す墓碑並み立たしけり秋山かげに
紅葉する山路をゆけば土の香に仄立つごとし遠きますらを

平成十一年

我が家の猫、九月四日の夜より帰らず、十日を経たり

朝早く吾をよびおこすなれの声十日も聞かずすぎにけるかも
鈴が鳴ると思ひて耳をこらしたる幾たびなりしこれの十日を
われを待つなが長鳴きを思ひつつこの門の戸に立つはむなしき
頭蓋へこみて帰りしなれを夢に見てさめてあやしむ夜もありたり
あさり貝ほじりてやれば喜びしを思ひつつ貝をくふがわびしき
ブロック塀の上より帰るなれなれば塀の上を見るけふの夕も
尾を咬まれ耳齧られて何かあると悠々帰りしなれにあらずや
放蕩のわが猫帰れ事故に遭ひて死すとし言はばえ堪へなくに
一年と半ばの若きながいのち瘦せよぼくれても帰れよここに

蚤とると櫛梳きやればのけぞりて大人しくせるなれなりしかな

なが小さき頭を爪で搔きやればああもしろかうもしろと向きをかへけり

網戸から居間に上がりて目もくれずゆつくりあゆむなれなりしかな

獐猛どうもうの小さき牙も威厳ある髭も忘れずわれは待ちをり

屋根の上、網戸の外からわれをよびしチビはいづこそ秋風の吹く

なが居らぬ背戸の小庭に尾の白き鶺鴒せきりい降りる日のつづくなり

昨秋、山口県立豊浦高等学校創立百周年記念式典にて母校吹奏楽団、校歌

を演奏す（校歌作詞高野辰之、作曲信時潔）

金管のゆらぎ光りて会場に校歌ひびけば涙ぐましも

乃木將軍狩野芳崖の靈氣ここに籠るとうたひき昔も今も

轟然たる讚歌聞き入る制服の若きらの上によきこと起れ

平成十二年

三月十五日に急逝せし松吉基順君を憶ふ

東京に君ありとひとり定め来し事断たれたるむなしかりけり

盃あげて語りし夜を相別れ日もおかずして君逝きにけり（逝去十八日前なりき）

太子会四土会といそしみし君のおもかげ見むよしもなき

おもかげも高き声音もうつしよの空にぞのこる巖のいのちと

白石の下宿の部屋に兄を訪ひし六十年前の君をしぞ思ふ

（白石とは山口市の町名、兄とは松吉正資兄）

兄の着物借りてくつろぐたくましきをさなき君をいま思ひつつ

兄弟が大きい声にて語りたるその響かひの中に吾もあつ

ふるさとの島の山辺にちちのみはひとりなげきましき兄かへらずと

ふるさとの蜜柑うれたりと歌ひけるその島山の秋のかなしさ

迅雷のとどろくたちまち失せたまふことのむなしさかぎりあらずも
とこしへのゑまひふめるうつしゑの君の目やさしと仰ぎ見れども

海軍の昔仲間と淡路に遊び鳴門の渦潮をみる

淡路島南の鼻の青山に円錐の塔高く立つ見ゆ

戦没学徒の塔とや遙か紀伊水道を見放け立つなりそのみたまたち

渦潮の鳴門の海の音立てて引き落つる瀬を近づきて見き

鋼鉄の空船からぶねさへも我が船と伴に行きつつ進みあへぬかも

大橋にむらがり立ちて下を見る人らを見れば小人こびとのごとし

鳴門海うしほ逆巻く早川はいまも神代も変らざるらむ

香川亮二兄より、昭和十七年撮影の写真数葉送付あり

正大寮玄関前（昭和十七年）

帰らざる友らたけくも居並びてわれもそこに在り古きうつしゑ
みいくさにいのちささげし友と共に吾も隠り世に在り立つごとし
帰らざる友あきらかに居並びて世にありなしのへだてなかりけり

坂本・西教寺合宿、本堂を背に全員写真（昭和十七年七月）

民族の悲劇をひしと思ひたる西教寺合宿はるかなるかな

田所さんのお声は澄みて求めゆく道語らしし思へば泣かゆ

僧の如くもののふの如く背を立てて坐るますらをみな逝きにけり

（前列中央の三人、百武・加藤・寺尾尚之）

大杉にこもる夕のひぐらしのこゑ耳にあり合宿思へば

正大寮解散のころ、談話室にて（昭和十七年十二月）

かなしみてをらぶがに見ゆうつむきて頭だけうつる、百武ならむ
誓ひは消えずとうたひてうせし江頭のきびしき姿ここにのこれり

冬至

湯を搔けば柚子湯の柚子が頬に触れ香りやさしく立ち揺らぐかも
でこぼこの柚子のくぼみの黒きさへ光りて見ゆる顔にふれつつ
時じくの香かくの木の実をささげもちおらびし古事ふるごといまに思ひき

一月十一日（誕生日）

亡き人を弔ひ帰る夜の空に月照りわたるわが誕生日
八十年前わが父母の子と生れしこの日よ空に満月光る

平成十三年

眞月院まことう慧光と照りて海の上の満月われを見そなはずかも

(上五文字は母光子の戒名)

家に帰り子が送り来しFAXをよみつつ夕餉とらむとすなり

蟹を食ひ汝が歌をよみ酒を酌みわが年祝ふともし火の下

二人して祝ふといへど遠き子らも共にありつつ過すこの夜

松吉基順君一周忌法要、大島安下庄安楽寺にて営まる

國のためのちささげし兄弟はらからよしづかにねむれこのふるさとに

平らなる海をねがひておはしけむ君らのねがひよろづよまでに

末透るまなこのひかり口のゑみそのみこころを忘るべきやは

花めでつつ兄のみまつり仕へたるその君をいまここにまつるも

法要のあと

死者生者共にささぐる一本のいのちありけりわが國がらは
青き海に神ながら立つ島にして鎮まりたまふ友のいのちは
子は父の友らにただにまめやかにふるまひて方丈にわらひごゑたつ

(基光君のことを)

星野貢兄のはがきに「ゆくりなくもこの残り世によき仕事めぐみ給ひぬ気
力出で来も」とありて

はがき一杯よろこび記す友のふみまた取りて読むともしびの下
夜久さんの古事記朗読CD化目鼻つきしとその文字躍る

古事ふるごとを声のまにまに伝へむと事興しけり友は青年のごとく
いや遠きみくにはじめ語りつき語りつきわれも死なむと思ふ

沖繩戦没学徒慰霊祭の近きを思ひつつ、折しも新緑あざやかなり

沖繩失陥の夏や近しと青葉かげ雨のしづくに立ちて思ふも

草も木も鉄血・ひめゆり悉くいのちささげて失せしみいくさ

神死にて神ぞ生まるる古事ふるごとのよみがへるらむ常若日本とこわか

年毎に青葉若葉と生きつぎていのちはてなしそのみたまたち

長内君朗詠CDを聞き戦死亡友を思ふことしきり

古事記をうたひいのちをつぎてわが友らいのちささげしいくさなりけり

心こめて友が誦へる万葉歌亡き友おこして聞き入るわれも

うせにける友の心に生き生きとありし日本のいのちをろがむ

ますらをのかなしきいのちささげたる友ら鎮もる靖国神社

平成十四年

それぞれに思ひも深くうせにけるつはものたちのみ社ぞこれ

妻の手術をはりてのち

胸の管つなぐ機械を押しして歩く廊下は広し妹が癒えゆく

ひとりビール飲みて更けゆく小夜中を妹寝ぬらむか白きベッドに

あす妻退院といふ日

明日帰ると心弾みて思ふとき帰るなれこそ何思ふらむ

物がどこにあると判らず七十日借り家にゐたる思ひさへしき

明日帰るとわが待つ人はわが家のまことのぬしと思ふをかしさ

西長門・島戸に遊ぶ

妹と来て浜辺をゆけば潮風は高き空より吹き来さやかに

瀬の波は遠くさやぎて青々と潮満ち来らし島戸浦わに

角島にかかる大橋白く低く見ゆる海もに秋は来にけり

幼かりし子らと遊びし角島をま向ひに見るこのテラスより

長内、星野、小柳、香川君と共に加納、夜久両大人を囲みて

雑踏のホテル二階に杖つきて大人ら来ませり秋の夕をゆふべ

過ぎし跡かへりみ告らすみことばのいきいきとして聞くがうれしき

八十八のよはひ保ちて時にして強きことばを告らしましけり

たたかひはとはにつきずとふみ言葉をうべなひて聞くともし火のもと

新宿のホテルに集ふ友らみな老いてかがやくそのゑまひはや

八十八のながきよはひをたたかひておだしくぞいます加納・夜久先輩
ともし火の明きが下もとに語りまししそのみ声聞ゆこのうつしゑに

廣瀬誠兄より、富山市における御製碑建立除幕式の栞とスナップ写真をい
ただきて

(その御製「雪となり花とはなりて富山なる競技場埋め人ら踊れり」)

秋の日もさやけく幕の綱を引く友すこやかにありてうれしき

明治より代々四代の大君の御製碑ここにと友のべ給ふ

雪となり花とはなりてとふ大みうたに心とけゆく民のさきはひ

大正昭和のみかど雄々しと仰たてやまぎまししその立山の姿恋しも

平成十五年

庭の梅

吹きし捲く風に小雪のまじるなか咲きしづまれり庭の梅が枝

この縁に坐りて何を思しけむありしその日々わが父母は

世々を経て持ち継ぐ心は何ならむかしこみ思ふわれも老いつつ

朝戸出の道辺の霰消えもせず風いたづらに身に沁みて吹く

伊豆石廊崎にて夜久さんの歌を思ふ（河口湖で集った海軍集会解散後）

石廊崎の岩鼻に立ちて歌ひけるひとの歌思ふあもここに来て

亡き友と共に見しとふ海原を歌ひし歌よ遠き広き海よ

風ぎわたる太平洋にむかひ立つこの岩鼻に日はそそぐかな

夜久さんへ

伊豆の国いらうが崎と歌ひ出でし先輩とともの歌はやいつか忘れむ
岩にわれら立ちて見しとふ遠き日の御代の姿のなつかしきかな
もろ立ちて魂きたへしとふことのはに石廊崎の海よみがへる
海原と巖いははと先輩ともらとこしへに留むるうたよ石廊崎のみ歌

夜久さんのお歌（昭和二十九年）

伊豆の国いらうが崎に立ちて見る大海原よ子らに見せし

ともにみし友らはいづこあらしほはありしさながらいはむらあらふに
むさし野にほととぎす来て鳴くらむと遠偲びまつるさきくませといのる

長内君へ

われら慕ふ桑原さんが髪振り立て雄叫をたけびし姿いまも目にあり

なすこともなき老人が語るべき直き思ひのなしと言はめやも

君のはなし終らば桑原さんが笑みまさむと信じて君のはなしを待たむ

御殿場合宿の帰途、沼津御用邸記念公園を拝す

松いくもと傾きながら亭々と立つ浜庭のつはぶきの群れ

太后御日拝の間の廊下まより畏み思ひき昭和の御代の日々（太后は貞明皇后）

老松のつづく浜辺ゆ見ゆるべき富士の嶺ねまたく雲の中なり

迪宮みちのみやに仕へまつると將軍が禪ぜんしめて泳ぎしはここか

（乃木將軍を憶ふ。迪宮は昭和天皇）

天城連山遠見はるかし海の気を吸ひ給ひしか皇御子たちすめらみこ

豊かなる御国のすがたそのままに生きてありけりいまの日本に

孫の運動会

竹山は揺れ輝きて雲もなき朝空のもと子ら運動会す

台風の名残りの風は高空を吹き通るらむ日影まぶしも

全体体操の中に見出でしわが晋は力をこめて手振り足踏む（晋は晋右なり）

赤帽のまご一心にわが前を駈け通りけり地響き立てて

小さき影を目にとめ追へばあなあはれ一着と見ゆ遠目なれども

弁当を囲みて一等を誉めやればうれしとうなづく小さき三年生

慰霊祭の折、小田村さん遺品の万年筆を夫人より頂戴す。帰宅して開く

小田村と刻印のある大きき万年筆手にとり思はず頂きにけり

強き力流るる筆の文字跡をつね思ひつつわが文字書かむ

国のため振ひし筆の命毛いのちげと畏み持たむわが手のうちに

平成十六年

新和布^{わかめ}を諸友に送りて

穴門の豊浦の宮の古事を伝へていまに刈る和布かな

わが里の速き潮の春毎に刈りとり和布神ながらなる

よみがへる春のしるしと早鞆^{はやとも}の瀬に採るわかめ安らけく食^をせ

老い給ふ友らうれしく受くといふみふみつぎつぎ遠くより来ぬ

上京新幹線所見

何といふ山かは知らずしろじろと桜花咲く山のしたしさ

枯枝の明るき山にまじり立ち桜はひとり咲きさかりをり

山かげの家のさ庭に咲き満つる桜ひともと見つつともしむ

海の辺も遠くの山もことごとく桜花咲く日本の春

東海の春の霞を透きて立つ富士の大嶺見つつ行くかも

忌宮数方庭祭
すはうてい

風渡る道の暗きを妻とゆく数方庭の鉦にひかれて

にぎはひの鉦と太鼓の音の中人かきわけて社殿に詣る

大幟のぼりの撓しなふ高竹持じつ子こらが歩めば揺るるその幟旗

塵輪じんりんを射貫やきたまひし大御稜威祝みぎ舞まふ久米の子らのその末

音立てて竹倒るれば大幟も暗き夜空に揺れて倒れぬ

鉦太鼓高鳴るなへに大幟乱れ揺るるを人みな仰ぐ

香川亮二兄より、京都寺尾家親戚ゆかりの宏山寺など訪ねたる由を記せし

書信を頂き、かへしに

純忠院忠烈院の院号を示したまふみ文いま見たりけり

(寺尾兄弟の院号を記した母君御書簡の写し)

忠といふみ名を日毎に唱へつつ泣きたまひけむひとのかなしさ

二人のみ子ささげし母をいくたびか訪ひしと語る友のふみよむ

母君と御所のおそばを歩みしと友ふみに書く泣かざらめやも

木犀りくせいの香のころなりしと友いへばおん母のおもかげ目に顕てりけり

山田輝彦兄へ

あさかど朝門に風吹き立ちて翻る日の丸清しけふ明治節

さ庭べの木陰つはがきに開く石路の花しづかなりけふ明治節

病む友やいかにかおはす石路の花を歌ひし君を思ふも

平成十七年

わが誕生日

母のみ名みかうだいし慧光大姉を折々に唱へむとするけふの朝は

こまやかにわれをば知らす母とこそこのころ沁みて思はるるなり

あを産みて疾くみまかりし母なれどかなしくながく添ひたまふなり

八十三の齡かしこみわが妹と出湯の宿の夕餉ゆかけとらむとす

十日町小唄

打ちつづく越こしの雪崩を聞きつつも遠く思ひ出づ十日町小唄

かつがつに忘れずありぬ共にうたひし友の多くは亡きいまにして

双^{もろて}手打ち友とうたひし十日町越の小唄のなつかしきかな

みいくさをたたかふころの寮の中友とうたひし十日町小唄

大き手を引きつ差しつつ踊りたる新潟の友忘れざりけり（稲庭静一郎兄を）

長内俊平兄へ

二メートルの雪踏み分けて買物に行くとうふ友の歌舞ひ来る

わが里に梅盛れども北の友や詩を吟じつゝ雪道をゆく

雪にこもり友にふみ書く日々ならむ^{さかり}壯の時も老いにし今も

風花の時に舞へども花の枝に固きつぼみのしるき朝々

東中野修道君に『南京事件写真検証』を謝す

「長期戦」を唱へて革命計りたる内外の敵ありきあゝ支那事變はてもなき大陸の野にいくさしていくさの停めなしえざりけり

広袤千里退く敵の放ちたる嘘報おとし拡ぐる七十年のちも

あらざりし虐殺ありきとすめらみくさをおとし貶め振れしたばかり謀なるに

敗戦に追ひ討かけし支那人の虚報にねむる国人かなし

あらざりし虐殺の嘘ことごとく暴きし君のいたづきたふとし

証拠たる写真一枚だになしと明かしし書をいまみたりけり

南京屠殺館の大きやかたの中の実の謀計ことごとく君砕きたり

攻城の大隊長代理いままさみおもばうなづきまみおもさむ御面目に見ゆ

（『南京大虐殺』はなかつた）の著者・中学先輩、森王琢氏のこと

謀を打ちくだきつつ手をとりてまことの道をわれらゆくべし

長府乃木神社春季大祭

幾万の兵死なしむと大君のみ前に哭きぬ乃木大將は

国のため心も身をも砕きつと民みそなはします明治のみかど

心つくして生きたたかひし美しき国ぞまさしくわれらが国かも

くれなるの枝垂れ小花の老桜咲き静まれりみあらかのそば

桜

固き蕾と思ひし桜一夜さに花も開きし空のしづけさ

年毎に咲く木の花とおやたちもいのち足らひて仰ぎけらしも

靖国の苗をいただき子が植ゑし桜は大樹の花と盛れり

ほの紅く嫩葉と共に咲き開く靖国桜惜しみつつ見る

友あまたゆきにしいくさ思ひつつ仰ぐ桜のおほきしづけさ

豊功神社報国隊祭

宮崎の岬の宮の祭礼の幡音はた高く天にはためく

北越のいくさに遠く立ちいでしますらをあまた還らざりけり

持ちゆきし火繩の砲をいま打てば耳もとどろに音炸裂す

重き砲持ちて動きしつはもののいくさ偲ばゆ轟く音に

小田村夫人に（小田村理事長七回忌の集ひ・礼状）

すめろぎのおほみいくさを生きましし君をし思ふ人みなしたし

み教へをしのびて語る人のことばみなやはらく部屋に満つるかも

ゆきましし君がみあとを思ひつつけふ酌むみきはかしこかりけり

お身内も友らもろとも「冬の夜」の唱歌うたひて君しのびけり

翌日、長内君と明治神宮を参拝

玉砂利を踏みゆく足音あおとしみじみと聞きつつ詣る明治神宮

若き時も今も足音は変らずか友と進みゆく森の詣り路

楠若葉萌えたつ中を赤松の高き大幹目にしるく立つ

ロシア軍を満州に討ちしみいくさのみいつはるかにをろがみまつる

大前の楠の若葉のみどり萌えさゆらぎもせず五月雨さみだれの中

ここにして日嗣の御子のお詣りを待ちまつりきと友はいふなり

スカイダイビングの話に興ず

ハワイ上空六十六歳のわが姪がスカイダイブをせりといふなり

四千メートルの空飛びいでて息も詰めずインストラクターに支へられ落ちたり

といふ

共に飛びし人近寄ればその手握り共に落ちゆくスカイダイビング
手放せばたちまち遠く空に別れ落ちてもゆくか離れ離れに
傘開くその一瞬にわが股は裂けよと開き空に浮きたる

貴乃花もかくやとばかり一直線に股開きたる写真に映る
傘の紐引けばそのままの方に速く鋭く身は飛び行けり
落下中の写真を見れば陸地海岸みな空にありわれをめぐりて
七人の孫もつばばがおもしろき遊びをせりと口あけて笑ふ

長内俊平さんへ

土砂降りの夕雨の中郵便受けより濡れつつとりし君からのふみ
わがふみの届きたるとき青森は音たてて雨降りしと聞くも
畑つものうれしうれしといふごとく君がきく雨しのぶもたのし

時おかず返せし君のふみと共に大夕立がわが里に来ぬ

み佛は暁ほのかに在すとふ筆あとうれしく見つつありけり
サイパンのみたま慰め給ひける陛下は夢の佛にまします

妻入院の間詠める。およそ一ヶ月、八月十三日退院

孫見ればベッドの妻が一瞬に潤うるほひに満みつうれしかりけり

美酒をくれたる子へ四首

たぐひなき旨酒うまさけの盃吞はいみ干して一人ぐらしの夜はふけわたる

周防田布施農学校の作りたる酒冷え冷えと肚はらに沁しみむなり

畑はたけに立つ宮沢賢治を思ひつつ農学校の酒いよいよしたし

田を作り神に献かぐと醸かむ酒の旨き味はもこの国の酒

乃木大将の色紙

乃木大将富嶽の色紙壁に掛け花なき瓶かめを床に置きたり
地霊人傑是神州の文字朝夕に見るがうれしも大将の文字

夕餉三首

鯪あらの身の洗ひの白き箸にとり夕の酒はひとり酌むなり
一人して夕餉とるとき扇風機の羽音しづかに聞こゆるばかり
野菜屋の胡瓜と茄子の漬物を洗ひて食はむ酒の後には

妻に三首

なが病すべて事なしと聞きえたる朝の草の緑目に沁む
雨雲の去りてただ射す強き日も恵みなりけり老いを生きつつ

顔の皺はさあれ日にけに柔きなれが目許や退院近し

長内俊平君へ

テレビ消しひとり酒酌む夕どきは心樂しも友を思ひて
茄子を焼きうま酒酌めば近々と祭太鼓の音聞ゆなり
ひとり酒くみつつ遠き友を思ひ歌おくらむと紙を展^のべけり

明日退院のゆふべ六首

夕酒にひとり和みて声に出し歌うたひけり中学校歌

二度三度声調へて唱ひけり「乃木將軍のあれにしところ」と

「乃木將軍」「狩野芳崖」稱へたる歌の心のなつかしきかな

ピアノ叩く信時潔の太き指思ひて唱はむ強く柔く

喜びの溢るる歌か若き時も「昔偲びて」「進む」と唱ひき

田中校長の丸きお顔も面影に立ちてなつかしひとりくむ酒

油山慰霊祭献詠

わが大君の大きみわざの先駆けといのちささげしみたまたちはも

わがすめらみくにの今をただにますぐに見守りてあらむみたまを思ふ
ますらをのかなしきいのちと仰ぎまつる道は絶えじな万世までも

東京国際女子マラソン

シャツの背も靴の裏さへくれなるの高橋走る折り返し点（※高橋尚子）

三人の先頭グループに黒と赤の縞のパンツが日比谷を走る

上り坂にかかるその時スパートしてひきはなしひきはなし高橋はゆく

沿道の声援耳にきこえなむリベンジの坂を高橋はゆく
大観衆に手をあげゴールしたりけりその笑顔人のこころゆるがす
身も心もこの年月を鍛へけむ人のわざなり涙ぐましも

平成十八年

お題「おと笑み」・友（寺尾博之、尚之）の写真に
兄と弟並びて笑めるその目見まみにひとよ一世のいのちこもりてありけり

建国記念日

終戦六十年を遠しといへどいやさらに樞原の御代はるか畏し
畝火の樞原にして天の下治らしし時ゆ一系の君
みいくさに敗れし今もわが大君国のま柱と立ちいますかも

一系の天子富士の山とうたひたる明治の御代の人慕はしき
旗振りて共にし歩む人々とみ国のさちを祈らむけふは

黄沙

土降るとふ空にしあらむ大橋も海峡もかすむ筑紫も見えず
名残の花ことごと散りて高層のビルひそと立つ土降る中を
黄河の上蒙古の空ゆ海くがを越えてや来つる黄沙のかすみ
狂瀾の黄土に堪へて生くる人を思ひこそやれ大和の民は
門の辺に置きたる鉢の石楠花の色新たなり昼の日かげに

横田めぐみちゃんに、父と弟が呼び掛くる映像を見る
韓半島ソウルに來り呼びかくる親の声なり娘よ聞きえしか

訥々と語る言葉はかはらざる親のみ声ぞ娘よこいづこなる

弟も忘るる間なき年月といふなり姉よ聞きたまへかし

キムジョンイルの崩るる近しと弟は声はげまして言ふいのちあれ姉よ
からくにの五月の若葉ゆるがして電波よとどけ堪へて待つ人に

長内俊平さんへ

独り居の夕は友を恋ひて飲む友が歌ひし歌をうたひて

ますらをの歌詠み出づる友の声日本の声ぞしみじみと消ゆ（長内兄C D）

十日町小唄歌ひて踊りたる笑みのががやき今も目にあり（加藤敏治兄）

「海濤天を」と立ちて気負ひて歌ひたり我も手を打ち共にうたへり（川井修治兄）

「あゝ玉杯」並びて歌ひし先輩方の姿を思ふいま吾もうたふ（小田村、加納、夜

久兄）

ひとり酌みひとり歌ひて声にならず聞く人もなき夜のさびしさ

濱崎衛大兄より「小串盆踊り口伝聞き覚え」をいただきて

荒海を漕ぎいづるみ祖しのぶらむ歌人荒雄が「覚え書き」書く

三味も弾かず太鼓も打たず浜の夜を歌ひ囃して踊り明かすと

古老たち手足体をしなやかに踊るをただに君讚へけり

いさな勇魚とる海の荒雄のかなしびの絶えずもあらかな小串盆踊

ひよどり鴨 関門海峡を渡る

幾たびも森より発ちて森に帰りまた空を舞ふ鴨の群

群なして舞ひわたりゆく鴨の影見えずなりぬ朝日さす空に

平成十九年

白内障手術

強き光を正眼に受けて台の上仰向くわれやただ待たむのみ

小さく優しく語りかけつつ女医はわが水晶体をとらむとすらむ

烈光に手先揺らして時の間を進みもゆくかこの医師の業

アマテラスオホミカミの御名念じけり闇に熾さかれる火を見つめつつ

眼帯を目蓋に貼られ起き上がりゐやいふ時ぞうれしかりける

わが帰る道の行く手を鶴鴿のとまりては飛ぶ遠くまで見ゆ

絵本「クジラ雲と夏帽子」(福永眞由美著) 読後

母をよべと心を籠めて終る詩うたよみて目に沁む海の絵雲の絵

滄くき海を潜る鯨が歌唄ふ王者の歌をと母は告らすも

白いパラソル握れる母に海の風吹き通ふらし髪立ち乱る
母に聞きし鯨の歌をそのままに孫に告げやる老いの伴はや
「母さん」「おぢいちゃん」と大きく呼ばふ子の声や消えずありけりわれらの空
に

阿蘇、一心行の大桜

傾なだれ野に立つ大桜霧に濡れ咲き鎮まれりめぐりて仰ぐ
カルデラに四百歳生ひて独り立つうすくれなるに花盛りして
戦国の武将弔ふ一心の大桜いま咲きさかるなり

関門橋

大橋より遙々見たり豊浦の海の珠なる沖津おきつへつしま辺津島

夏に入る山は霞みて豊浦の二島ばかり目に沁みて見ゆ
仲哀天皇出で立たしけむ早潮の海や目前まさかに流れ奔るも
神ながら流るる潮まな下に見て渡りけり関門橋を

瀬戸を越え筑紫の山を貫き通り大路はつづく今さいかいだう西海道

関門海峡

旗艦日向聯合艦隊迎へむと旗振れりけり小学生われら
甲板に水兵並び軍艦はわが前を行けり波起こしつ

早潮に乗りて大船行き通ふわが浦亜州に真向ふところ
要塞砲在りし火の山青々と瀬戸の岬に立ちて変らず

田之浦の国立米穀倉庫群遠目にも見ゆ朝霧の中

共に海軍予備学生たりし山中与吉君没せりと

君逝くと聞きてたちまち笑窪まぐぼ深くこちらに真向く面の去らずも

刃金のごとく弾む手足を振りたりし君青春のいくさの日々を

一枚の葉書に大きく書きたりし君のことばのあはれなつかし

忽々に相別れたる銀座にて君の疲れを見たりしはいつ

会ふ時も会はざる時も笑窪ありしその名与吉は忘れざるべし

松吉正資の遺詠が縁で知り合ひになりし山本日出子さんから「(秋田国体で息子が)入場行進の折、両陛下の前にさしかかったとき、胸の位置に持っていた小旗を、息子は、恐れ多くも陛下に向けて高くあげて振ったそうです。すると陛下がそれに御手を振ってお答え下さったのです。とても感激したこととして話してくれました。まあ何とも大胆なことをと聞きなが

ら身の縮まる思いでした。」とありければ、返しに

小旗振る若きと壇上にいます陛下との目前まさかの通ひありと畏む
われに向ひ御手振らしける大君と忘れずあらむその若き子や

福智山

大橋の橋下遠く見えわたる山は福智か夕の空に

筑豊の境に立つと知られたる山の頂遠くもあるかな

早鞆の涌き立つ潮の西遠く福智の頂あきらかに見ゆ

わが祖父が業起したる炭鉱の最中の山をはるかに見たり

早鞆の前田の浦は夕まけて澄みわたり見ゆ筑紫連山

「国民同胞」十二月号を読みて長内兄へ

加納さんのみ声そのまま聞くごときその文記す君を思ふも

「昨夜おそく窓を開いて」とふみ声なほわが耳にあり加納さんの合宿講義

祭壇に掲げられたるお写真を思ひつつ君の弔詞を読みぬ

太子慕ひて生きましし道を仰がむと君はすなほにますぐに記しけり

ゑみませる影そのままにわが国の直き柔かき道仰がるる

冬晴れ

北窓に雲一つなく学校の土手に子ら見ゆ冬晴れの朝

学校の丘の林の葉ことごと落ちて明るき空透きて見ゆ

賀状四百袋に提げて出しに行かむ晴れて風吹く石畳道

北に住む友は日毎に雪積みて空の暗しと言ひ寄りけり

妹と背と合せて一人前といふ友素直なる老いの楽しさ

平成二十年

山田輝彦大兄へ・川上峽谷古湯温泉

川上の激つ流れと学校の白き運動場見ゆ湯に浸りつつ

この宿を教へし友やいま病みてわればかりまたたづね来しかな

川上に友と遊ぶと歌ひたるその友らはやいくさに死にき

(百武禮之、江頭俊一らほか佐高同信会の友を)

不知火の筑紫に生きて誓ひたる友のいのちの恋しきろかも

灯火の見ゆる谷間となりにけり友を偲びて暮るる湯の里

病床の加藤善之君を見舞ふ

青き海明るき浦曲うらわを君は見はず眼つむりてひとり臥すかも
握る手を力をこめて離さざるベッドの友ををしと思ひき
愛はしき妻の支へに君よ蘇れ青き海面に目を向け給へ

「信貴通信」に添へられてありし青砥宏一君法要の献詞の結びの御製

鳥（明治四十四年）

うちつれて渡るをみればとぶ鳥もおもひおもひの友ぞあるらし

を拝して、長内俊平大兄へ

空をわたる鳥にも友ありとよみましし大御歌仰ぐ君の心はも

太子示します「廣道」と「友ぞあるらし」の大御歌と結びて仰ぐ君の文はも
なつかしき御本に難き文字はあれど友の声聞こゆその書よめば

玉造の里に隠れし友（青砥宏一兄）のたまに呼びかくる文しみじみと読む

夜久正雄先生のことを

慈しみのまなこの光偲びてはなつかしきかな遠き日も今も

二月十日

紀元節近き朝々梅の花咲きつづくなり友に見せたし

水仙の花開きたり桑原さんを思ふばかりの清きやかなる色

雪深き友の家居の空の上に光はあらむ春を待ちつつ

古き国新しき色一すぢの春のいのちを思ふうれしさ

事務所に掲ぐる長内俊陰君の絵

なつかしみ折々に見る「エノコログサ・六十七は鼻たれ小僧」の絵
よく見れば穂先の相草の色すがたきほひありけり小僧のきほひ

道端の風のきほひもなつかしく六十のころかへりみるかな

九十にならんずわれらみいくさのはたちのころを折ふし思ふ

めをと共に老いて生くればかしこしやわが大君の千代いのりつつ

佐賀に向ふ

筑紫野の河渡る電車の中にして揺るる胸内遠き日の如し

八代の友許がり行きしを思ひ出づ汽車轟々と河渡る音よ

若き日も老いたる今も友に会はむと心揺れつつ春野を走る

散歩

川低く楓の青葉色透きて繁る辺りや水音高し

友の住む北国の花も過ぎつらむ空晴れわたる弥生の朝

小さき川に鴨戯るる朝なり桜青葉の下道を行く

百あまり四十年前のこの道を行きけむ人や西に東に

三條公・東行・俊輔往き来せる門前の道空はろかなり

岸本弘兄へ（長内俊平著『文化と文明』出版を謝す）

月見野に友と若きと集ひして語る声々思ひ見るかな

師の書を世に出だしたる人々のよろこぶ声々聞ゆるごとし

人の心を抱ふるとき言葉もて道を求めし友にしありけり

熊老いて家に隠れどその野良に若きら寄りてほぎ申しけり
わが文を若きが読みてくれけりと友がしみじみ泣くと聞くかも

美保神社参拝の旅

波もなき日本海の磯岩に立つ鶴の鳥を見つつ旅ゆく

ゆるやかに南の風の吹くらむか日本海は遠くかすめり

美保の関この沖にして駆逐艦「わらひ蕨」沈みき思ひつつゆく

八十年前猛特訓に失せにけるますらをのいのち思ひつつゆく

(三井甲之作「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるや

まとしまねを」を偲びて)

とこしへに国の守りと大神は神さびたたす海に向ひて

「神州不滅」、「進めこの道」のピアノ演奏CD版頂戴を謝す

(小林祐子君とその祖父長内大兄へ)

心こめて叩く楽の音胸にひびき涙にじみてくり返し聴く

三井先生の詩の詞の一つ一つ胸に沁みつつ聞きあたりけり

乙女の鍵しなやかにして老いの男が涙ぐみつつ聴くぞこの曲

この強きしらべに和してうたひたる友やいくたりうつならねど

長内もわれもこのうたうたひつつ生きのかがりを行かむと思ふ

長内俊平大兄へ―祐子ちゃん婚礼おめでたう

美しき衣装まとへる子ろを見て一とき泣きぬと友はいふなり

大前に並ぶ妹背をうつくしとかしこみ祈る祖父母目に見ゆ

遠く弾くピアノの曲をわれは聞く門出の歌の進めこの道

筑後行

おやおや
祖々が仕へまつりし宮居なり人無き庭にいちひがし立つ

うぶすなの宮の鳥居に刻みたるその名をなぞるわが孫子たち

光風と名告りしおほぢの里に来て若き面立ち見る思ひすも

大楠のむら立つ緑矢部川の瀬の音近き久く惠ゑの里なり

湯を出でておほぢを語れば酒もよし歌またよしと子ら氣負ふなり

なだらなる遠山かすみ古里の筑後広野の朝あけわたる

国文研慰靈祭（東京大神宮）

みたまたち呼ばふ宮司の細き声一つ心にわれら聞きけり

先生のみ教へのまま道ゆきし師友のうつしゑ目にとどめけり

ふるさとに声を残して出で立ちし友を語れば涙ぐましも

なつかしき人とま近く語りあへば亡き人のことしみて思はゆ
なつかしき人と語りて酒くめばわがなき友とのむにも似たり
宿にまで送りてくれし友と大声かはしつつのむがうれしさ

明治神宮参拝

参り路をひとり歩みて遠き日に友と詣りし足音を聞く

大御国の光と仰ぐ大神にただ祈るなり御世の幸はひ

大前に仕へ立たせる大樟の葉むらやさしく秋の日に照る

森深く鎮める宮の帰り路を外国びともしづかに歩む

あさぎまだら
浅黄斑

藤袴咲き開きたる花房に蝶の寄り来る朝のしづけさ

藤袴に浅黄斑が寄るといふまこと寄り来ぬいづこより来し
四羽ばかり斑の蝶が翅を閉ち花にとまりて蜜吸ふらしも
浅黄斑は遠く旅すと聞くものをいづこに発つや柔き翅もて
大海の波頭なみがしらゆく浅黄斑見し人ありと書もいふなり
翅とちて花にとまれる斑蝶遠く波がしら越えゆくらむか

行進曲 「進めこの道」

わがいのち終りし時もはるかなるいのちの調べ打つかこの歌
友逝けば小さくやさしくゆつくりと心に歌ひき「進めこの道」
祐子ちゃんが心をこめて弾くピアノ「進めこの道」を折節に聴く
このそと
九十近くを生きて老い痴ぼれる身もなほ友と歌ひたき歌

夜久正雄さんを偲ぶ会の翌朝、長内俊平大兄へ

陸奥の友の家族と手振り別れたるゑまひ思へば泣かざらめやも

心知る友と別れて都出づるその朝戸出あさとのいでふ下道

皇居前いてふもみぢの並み樹たてるしづけき大路つつしみて過ぐ

大君のはたとせ祝ふふるさとのうたげに帰ると東京を發たつ

御在位二十年奉祝下関市民大会にて東儀秀樹氏の雅楽講話を聞く

箏ひちりきの樂の音高く堂に満ち遠く天より降り来る如し

みまつりはただ一筋に伝へられしとつつしみて聞くその樂の音を

笙しやうに和し高く鋭く鳴り出でて胸にぞびびく箏の聲

西洋の樂器ひきゐて箏ふるなごは「故郷」を吹く高く鋭く

千年ちとせこゆる雅樂のはなしをよしと聞き喜ぶ人ら面のかがやく

平成二十一年

山田輝彦さんの逝去を聞きて三日を過ぐ

西の方夕の空に向きて歩むみまかりましし友思ひつつ

ここのそぢ生きにし友のみはぶりをしぬびつつゆく夕のみちを

歌を直す君のことばに若きらがゑらぎとよもす声耳にあり

歌ひおらびみいくさに行きてかへらざる和多山儀平を君は偲びき

友の歌古への歌ことごとく君が祀まつりしいのちなりけむ

わがやまとのことばのいのちぞ神なりけるほかはいらぬと君いひたりき

白梅の咲きのさかりの小さき道ゆきつつ思ふたふとき友を

花芽ややふくらむ桜下道を友しくしくに思ひつつ帰る

山田輝彦さん晩年の歌を書き写して

君の歌書き写しつつ独り居ひとの君を訪はざりし日月思ひぬ
夢にかも似たりといひし歌写す夕ゆふべの窓に風さやぐなり

(山田さんの歌)

「わが生のさい果てにしてかへりみる過ぎし日なべて夢にかも似る」
友の自刃を悼いたみて歌ふその歌に響とよみもやまぬ力ありけり

(山田さんの歌)

「国亡ぶときに男の子はかくあれとみづから命絶ちし君はも」

石薔つはぶきの若葉を見つつ石薔の花を歌ひし君をかなしむ

春場所十三日目、豊真将十勝目を挙ぐ

立ち上がり押されてしぞき土俵際はづに押し出で押し勝ちにけり

さんばらの髪打ち振りてゐや正しく花道帰る豊真将なり

稽古積み型究めむと言へりとぞ聞けばうれしもさが偲ばれて

友の里波豊かなる小串浜に生ひし建男が一すぢを往け

長内俊平大兄へ

花一つ残らず若葉となりにけり雲寒き日のわが山桜

君が窓のくれなる桜うつくしく散りて緑の草もゆらむか

友のうた書き写しつつわが生も果てにぞ来しとつくづく思ふ

(前掲の山田さんの歌「わが生のさい果てにして・・・」)

みおやのことは友のことに支へられ生きて生き継ぐいのちなるらむ

五月風吹き通ふ空の下にして友もわれらもなほ生くらむか
さつきかぜ

夕

高空を雲曳きながらゆく一機形も見えず音も聞えず

風冴ゆる夕の空を仰ぎつつ心は遠くみいくさを思ふ

ラバウルの航空戦を戦ひし遠き友の名ふと思ひけり（中学同窓、今富芳郎君）

空中戦はおそろしきものよと後輩に言ひてゆきける猛きをの子や

ラバウル航空隊その名をひそと告げたりし男の子や遠き空に失せける

荒海のみくにのゆく手護るらむ神と鎮まる常若の友

昭和十七年某日、日本世界観大学閉会式における田所廣泰先輩の萬歳の声

澄み透る声一すぢに天皇陛下萬歳唱へまつれり田所先輩

澄み透る声一すぢにわが大君の萬歳祈りしとはの声かも

み声とはに忘れざりけりもろひとの遠き祈りを込めしその声

田所さんのいのちのみ声をりに慕ひてぞ来しこれの年月

田所さんの声のひびきは一すぢのみくにのいのちの奇くびなりけり

夜久正雄さん三回忌に上京

平成二十二年

空晴れて甲斐の雪山見つつゆけば富士は遠くに輝きてあり

白雲の漂ふ海の上わが飛機はしづしづと行く富士のかたへを

みまつりに詣らむとして東京湾上空針路は着地をめざす

齋場西方寺にて

うつしゑのゑがほは生きてみ声きく思ひするかも仰ぐわれらに
み教へ思ひ共に在りたる時のこと語らむとして声つまりけり

夜久さんを思ふ

若き日のみすがたみことばわがうちにありて生くべし老いらくわれらは
おほみうたよみて記せる大人のふみ弘めむと思ふ学びの伴に
古事記朗誦聞くがうれしさふることぶみのいのちのひびき大人のその声
戦死せる友の面立ちあらはれてさらさらに思ふ亡き大人のこと

両陛下、祝典曲「太陽の曲」を聞き給ふ―映画を見て

肅静の闇に立ちます両陛下御顔傾け曲を聞き給ふ

「心に染む」と聞き給ひける大君は闇の御橋に立ちて在すかも

時折に御髪をなでて聞き給ふ後の宮を仰ぐみ民は

もろ人の手に持つあかりゆらぐやみにひびきぞわたるほぎ歌の声

「ありがたう」とみ声給へば萬歳のもろ声とどろくその大前に

住吉神社御田植祭

住の江の神の稲穂の御田植の祭り明るく日は照りわたる

ほとほと太鼓の音の近づきて宮司たち森より来る

ほぎ歌に合せて子らが御田に立ち苗植ゑんとす照る日の下に

菅笠と赤き袴の乙女らが御田に屈みて苗植うるなり

菅笠の乙女の中にうまごなほ奈穂手ぶりもさやに苗植うる見ゆ（奈穂は孫の名）
海つ路の安けくあれと神祭る手振りかはらずいまのうつつに

窓硝子

窓硝子四方開けば青葉風さやと入りくるわが部屋うちに
窓近く咲き残りたる合あひ飲の花ほのかに揺るる澄む青空に
吹く風に杏子若葉は揺れやまず青きみ空はいや遠くして
遠き友美しき孫の蓋うきゆひ結に泣きたりしとふことをし思ふ

御題「葉」詠進

樟の枝切りたる跡に萌え出でし若葉は光る秋の陽射しに

響灘 ひびきなだ

曙の港を指して漁り舟爆音高く還りくるかな

響灘の空明けそめてわが宿の前ゆく舟の音のすがしさ

夜を通しすなどりしけむ響灘風わたりけり空明けそめて

わが大和の西の果てなるこの海の西に今もあり漢・韓の国 から から

わが大和強くぞ生きむ海を守りみ祖守りて強く生きなむ

響灘にま向ふ宿に休らひて心は遠く人を思ふも

更に思ふ

周防灘遠ざかりゆく大き船の消ゆるまで見き幼き時も

目に測るこの海の上に国後の境の海を思ひてや見む

この幅の海を隔つる国後に靴ふめりけりロシア首領は

尖閣も国後も我が国の恥心ゆりつつ年過ぎゆくに

卒寿といふことを

徒卒といひ卒然とふ字を思ふなりわが九十路かへりみすれば
亡き友と共に生きけり皇御国にただつくさむといくさの時を
矛とりて御門守らむ草の葉のいのちと生きむ卒つひの願ひぞ

小柳陽太郎兄へ（石村僊悟君の一文を読みて）

白梅の咲き匂ふ日やすこやかに君ありといふ文字のうれしき
老いるまま師のみことばに力ありと聞く若きらも還曆のころ
玄海の風に向へる立花山見さくる窓の部屋とちの羨しさ

平成二十三年

東北大震災（テレビ所見）

豊かなる国土水魔に曝されけり陸前陸中大洋の岸
岸を呑み家を倒して大津波急速無残に沃土を襲ふ

住みなれし部落も家も廃墟たり顔を覆ひて人は語らず

風雪に立つらむ人ら助け合ひ生くる姿や神ながらならし

勃興の気概はやがてみくにおこす道開くべしとただ祈らるる

長府乃木神社春季大祭

み祭を終へて罷れば散る花の降りかかりけりわれらの上に

潔き桜吹雪と仰ぐ空の眩しと語る笑みかはしつつ

仰ぐ空の北の大地の災ひを思ひこそやれ佇むままに

旅に見し奥の大地も山脈ももだし立つらむ春の浅きに

日々を共に暮しし形も失せし跡に人帰りゆく日はいつならむ
一つ心にみくにのために西東励みし戦後をまたなさむかな
誠をば正ただにつくせと乃木將軍見そなはずらむ清けき目見に

指宿海軍航空隊基地跡

大隈は霞に紛れ波さへも立たぬ海原夕暮れむとす
暗き海水緒みをを残して発つ二機の爆音を思ふ君は在りしと
六十あまり六年むかしの春末明君は発ちけりこの海の辺を
開聞よさらばと発ちし田良浜たらはまを目のあたり見つ暮るる夕に
一念をこめて発ちけむ出撃の爆音消えし空はるかなり
小松つづく基地跡にして石文に松吉正資のみ名しるく見ゆ
うつそみはよし砕くとも忘れじと歌遺しけりますらをわがせ

隱岐の島風景写真を掲載したる新聞をみて

日に光る稲田の奥に波止場見え青く果てなく海ひろがれり
隱岐の島に住み継ぐ友や年を経て遂に相見ることもなかりき
君も老いの仲間なるべし遠き隱岐の海軍少尉健やかにこそ
荒海の吠ゆる小島のここにして後鳥羽院の宮神上がりましき
ロシア艦隊ことごと討ちし海戦の音聞きにけむ隱岐の島人
死を決し共に励みし彼の友の潮焼けの顔目に偲ぶなり

奥野三男君を悼む

若き日の付合ひ失せず馴染みこし友が死にけり泣かざらめやも
「すまんな」とその恋妻に笑まひたる老いのますらを逝きて帰らず
われに向ひ残せる笑みや一筋にみ国に返る笑みなりしなむ

一系の天子の国に生れたりと紀元祝ひしわれらなりけり
国の恥国の傷みをなげきつつ酒かはしけり海に向ひて
棕櫚竹しゅろちくの風にそよぎて光る朝君を思ひてもの食はずけり

旧曆八月十五日

漲りて波立つ潮関門の橋の真下を流れゆくはや

満月の大潮の日ぞ夕まけて東に走る潮白波

国東の沖より潮は大洋に入らむとすらむこの夜を掛けて
わが「大和」水道南下薩摩沖に戦ひ死にきこの海の果て
世々を経て月照りわたる共に見し友やいづこと仰ぐこの月

あとがき（私の経歴）

私は大正十一年一月十一日、山口県下関市南部町の生れ。幼少年期に毎日見た風景は汽船、帆船の往来する関門海峡と対岸九州の連山だった。長じて山口高等学校に学び、折しも支那事変は対米英戦争に拡大し時局重大の時である。縁を得て日本学生協会（田所廣泰、小田村寅二郎諸先輩達）の指導の下に、三井甲之、黒上正一郎両先生の著書に導かれつつ、古典に触れ萬葉集に接することができた。山口の同宿で学校は違ふが（山口高商の）加藤敏治、一條浩通、同窓山口高校の松吉正資諸兄らと送った一年半は忘れられるものではない。佐賀、熊本にも同信共鳴、導きを受けた貴重な友人がゐた。昭和十八年十二月、東京大学に在学中応召して海軍に入る。その同じ海兵团でのちに航空隊に入つて特攻戦死する松吉正資、戦後九州油山で自刃した寺尾博之と三人で撮つた二等水兵の写真はその時の形見である。私自身は蛟竜艇長として出撃を待ちつつ敗戦を迎へ復員帰郷したが、市街一円被爆して家族は同市内長府町に移転して

ゐた。長兄病死後ひとり奮闘する父を扶けて私は家業（石炭鉱業）挽回に奔走した。

やがて昭和三十一年、国民文化研究会成つて参加し、同三十六年十一月、同会の月刊機関誌『国民同胞』創刊以来平成十一年八月号（第四五四号）まで編集発行に當つた。

長府城下町に住みついて六十七年、わが家の前の道路は二間幅の旧山陽道で、すぐ向ふが功山寺山門、高杉晋作挙兵の地である。兄弟弟みな早死にして既に亡く、妻房子同年九十一歳にて健。子三男みな県内に住し、孫七人。

いま私の半生の歌を読み返してみると、友に返す歌が何と多いことか。友との交流、友の恩。我が人生、「この道」はすべてそこからもらつてゐる。本歌集の出版は偏に前記（はしがき）三君の編集になるもので厚く御礼申し上げます。

平成二十四年二月四日

寶邊正久

歌集『この道』

平成二十四年三月二十日 発行

作者 寶 邊 正 久

発行者 國武忠彦・澤部壽孫・磯貝保博
印刷者 麻屋三英社

東京都千代田区神田錦町一、十五

〇三(三二九一)三〇七〇

